

私の座右の銘

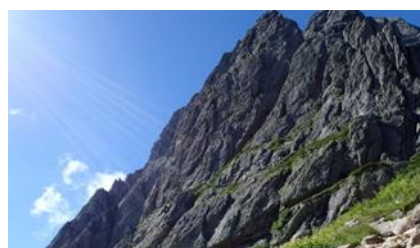
チンネの教訓「危険と困難」

中井 弘

半世紀以上も前のある時期、私は岩壁の登攀に魅せられ、ロッククライミングが専門の山岳会に入会し翌年の劔岳夏山合宿に参加した。

劔岳(2999m)は全山花崗岩の硬い岩からなり、激しい侵食によって深く抉られた谷底から高い岩壁が立ち並び、クライマーたちの日本有数のゲレンデとなっている。

ドイツ語の「チンネ」(大きな岩壁を持つ尖^{せん}峰^{ぼう})と名付けられた岩壁を目指す先輩たちをサ



三の窓コルから見たチンネの岩峰

ポートして、彼らの重い登攀用具を担いで長く急峻な「三の窓雪溪(氷河)」を登った。

三の窓コルで先輩は、「チンネ」が間近に見える岩の上に私を立たせ、頂上に登攀するにはどのルートが可能かと問うた。岩登りを始めたばかりの私には、この垂直の岩壁を登ることなど絶対に不可能に見えた。数時間の間、彼らが登攀するのを畏敬の念をもって眺めていた。

数年後、その山岳会は鹿島槍ヶ岳で大きな遭難事故を起こし解散した。

私は会社内の^{がくじん}岳人を糾合して山岳部を立ち上げ、穂高岳などで訓練を重ねた上で、劔岳の劔沢にテントを張りチンネ登頂を目指した。

数年前に眺めた同じ場所から今日登るルートを目で追った。訓練のお陰もあってか、今度は登るルートがよく見えた。高度感に^{すく}疎みながらも、それほど危険とは思わず快適に完登することができた。だが雷雲がみるみる広がり、雷が自分たちと同じ高さで鳴り始めた時の恐怖は大変なものだった。頂上直下の岩の下に金属製の登攀用具を押し込んで岩陰に逃げ込んだこと

が忘れられない。

ある時期から山の本を読む楽しみも手に入った。深田久弥や冠松次郎、加藤文太郎、松濤明などの紀行文、雑誌、山岳全集、小説に胸が躍った。井上靖の「氷壁」に触発されてナイロンザイル切断事故の現場・前穂高岳東壁や松濤明の遭難した槍ヶ岳北鎌尾根などを攀^よじ登った。

世界山岳全集でエルゾグ、レビュファ、ボナッティ、H・ブール、メスナーなどの著作に胸躍らせ、アルプスやヒマラヤに思いを馳せた。

フランス山岳会ジャン・コストの著書「アルピニストの心」で『登山において、<危険>と<困難>を明確に区別するのは難しい。経験を積み技術を上げれば危険は困難に変えられる』という一文に接した時、チンネの経験に理論づけができたと感じた。以来この言葉は「私の座右の銘」となり、人生観に大きな影響を及ぼしてきたと思っている。「チンネの教訓」である。



仙人池から劔岳遠望

中年になっての岩登りはむつかしい。そこで沢登り専門の山岳会に入会した。山靴を脱いでフェルト張りの沢靴に履き替えたのである。

大峰や台高の滝・釜・瀨・淵が織りなす溪谷美、神秘的な「碧」の流れを遡行する沢登りに傾倒した。激流の徒渉や水面近くを^{トラハリス}へつり、ザックや服を身に着けたまま泳ぐ。滝の中を直登するシャワークライミング。頭と体力をフルに使って難所を突破していく。夜は焚火を囲んで、谷底から小さな星空を見ながら仲間と語り、酒を酌み、至福の時間を過ごす。沢登りでは大自然の中で自分の技術と経験、知力、五感が生きる。ここでも危険と困難を峻別する「チンネの教訓」が生かされていたと思っている。